

子宮がん検診(神奈川方式)

動 向

神奈川方式による子宮がん検診は、昭和44年より神奈川県産科婦人科医会との協力事業として、県下の医会会員医療機関から郵便により送付されてくる細胞、組織材料について検鏡・判定を行い、その結果を医療機関に返送しているシステムである。通常日母方式と呼ばれている。

前頁の車検診が行政主導で行われているのに対して、神奈川方式は産科婦人科医会会員主導で行われており、両者相補って本県の子宮がん検診の骨格をなすものである。

18年度は、頸部検診において、検査数(前年比+1,806)、受診者数(前年比+1,698)とも増加している。

精度管理については、当該医療機関の協力により、精密検査対象者についての追跡調査が当協会の情報処理部により行われ、県産科婦人科医会のご協力により年一回の報告会を開催している。

方 法

神奈川方式子宮がん検診は日母(現日産婦医会)設立20周年記念事業としてスタートした。従って実施方法については昭和53年に日母がん対策委員会がまとめた子宮がん検診の標準化(日母方式)への答申を踏襲しつつ、平成18年度改正のがん検診実施のための指針に従っている。従って対象者は30歳から20歳以上に引き下げられ、問診、視診、内診を行うこと、コルポスコープを初回から細胞診と併せて使用することが奨められている。

体がん検診は頸がん検診受診者の内、問診の結果最近6ヶ月以内に不正出血、月経異常、褐色帯下のいずれかの症状を有していた者を中心に内膜細胞診を行っている。

子宮頸がん検診

平成18年度の子宮頸がん検診受診者は30,225名(前年度28,527名)で平成15年度26,504名を谷として年々増加傾向にある。平成18年度の指針改正で検診対象にくみ入れられた20歳代は4,651名(前年度4,038名)であった。

がん確定者は70名、発見率0.23%(前年度54名、0.19%)で増加した。内訳は頸がん64名、体がん5名、その他のがん1名であった。その他のがんの内

訳は卵管がんIc期である。

年齢階級別がん確定数では、29歳以下6名、30歳代27名、40歳代10名、50歳代8名、60歳代12名、70歳以上7名であった。内訳では50歳以上の高齢層に進行期頸がん(14)、体がん(4)、その他のがん(1)の発見数が多かった。

30歳代以下の若年層と40歳代以上の年齢層の比較では、30歳代以下の受診者数13,089名(総数の43.3%)、がん確定数33名(発見率0.25%)に対して、40歳代以上の受診者数17,136名(総数の56.7%)、がん確定数37名(発見率0.22%)であり、若年層のがん確定数、がん発見率の増加が顕著で、若年層に対する検診の重要性を裏付けている。

病期別的には30歳代以下で発見された頸がん32名中、0期29名、Ia期1名、Ib期以上1名、腺がん(AIS)1名で早期がん中心の傾向が強まったのに対し、40歳代以上では37名中、0期11名、Ia期1名、Ib期以上15名、腺がん4名、病期不詳1名で高年代層に進行がんの多い傾向は変わらなかった。

頸部腺がんは増加傾向が指摘されているが今年も5名のみであった。

異形成については確定者数175名(発見率0.57%)、内訳は軽度異形成97名、中等度48名、高度28名、腺異形成2名。年齢階級別では30歳代以下が97名(発見率0.74%)、40歳以上78名(発見率0.46%)であった。全年齢発見率は昨年度と変わりなかった。

子宮体がん検診

平成18年度の体がん検診受診者は7,638名(前年度7,626名)、頸がん検診受診者の25.3%(前年度26.8%)であった。

がん確定者は30名(発見率0.39%)。内訳は子宮体がん24名、体がん以外の悪性腫瘍として卵巣がん(転移がん等を含む)6名が発見された。その他、前癌病変として内膜増殖症12名が発見された。

発見された体がんの病期はI期の早期がんが13名(54.2%)、II期以上の進行がんが9名(37.5%)、病期不詳2名(8.3%)であった。今年度は30歳代の若年体癌が1例発見されているが癌床的背景は不明である。

関係の集計表は90頁に掲載